

なく、ボヘミアに於ては獨逸兩國人の企業に對し、上部シレジアに於ては獨逸人の投資と云ふやうな事の爲めにひいては獨逸波蘭間の國際問題を起しそれがやがて、英佛聯盟の上に影響するであらう、從つてこの地域の鑛業工業等の復興に關しては「主たる同盟及聯合國」の間に協同一致の平和維持と云ふ事がなくてはならぬ。

之を要するに、この政治的に變移多き地帯は東、西歐洲の中央にあると云ふ點から生じたもので其政治的經濟的問題は其地理的人文的事情の複雑せるに胚胎するものである。バルチツ

ク及地中海の陷落と中央部の鑛産が西歐人をこの方面に引きつけたゝめに政治問題は更に複雑となつたのである、恐らく將來長期に亘つて猶不安がつゞくであらうが、結局に於てこれらの新興國が西歐洲に對して反動を起す時が來たならば、それは實に全歐洲の破滅である、主として地理學的原因より生じたる政治的經濟的の困難なる諸問題の解決をはかるには、どうしても國際聯盟の協力一致が必要であり平和と繁榮との維持を第一義とせなくてはならぬ。

(藤田元春抄譯)

宮古島の結婚と祭禮

ネ
ブ
ス
キ
ー

ネブスキー氏は露國ペトログラード東洋語學校出身の新進東洋學者で、世界戰爭中に日本に

來り小樽高等商業學校に在職中アイヌ民族を研究し其後新設の大阪外國語學校に遷り京都大學

文學部でも露語をも教へられ、本年二月十六日史學研究會に於て昨年五月親しく旅行して研究された宮古島の土俗に就いて一場の講演を試みられた。左に其の概要を掲ぐ。

宮古島は沖繩諸島の一島群でマク(宮古、麻姑)イラブ(伊良部)、イキマ(池間)、フキマ(來間)シムジュ(下地)タラマ(多良間)ミンナ(水納)の七島から成立つてゐる。

同氏は種々研究された中の結婚の風俗に就き東宮殿下御慶事の際にちなんで述べられた。宮古島の結婚では媒酌人ナカビツ(中人)の代りに親達が婿側から申し出るので、婚約期は三月から二年に亘ることがある。男から女への結納(もとは豚魚等の肉、薪等)は此頃では金銭となり共に酒も贈ることになつてゐる。此のサキ(酒)とは泡盛りのことで日本酒は大和酒として區別する。最も著しく内地と異るのは婚約は娘に知らさず、間際になつて娘の友達が村の何處かに好男子が居るといふ位の暗示を當人に與へる位である。若し不承知の時には衣服着物等を破はす

ので意志を發表して絶縁する。

彌々舉式の三日前になれば娘はカフキル即ち隠れることになつてウラザ(奥座敷)に引籠り、一日に卯一二位を取る外に殆ど絶食する。前日の事をバタラキビ(働き日)といひ、ムクゾウ(婿代)として夫婦をろひ、子のある立派な人を選んで、これが媒酌人となる。

此のムクゾーは市街(フサラと呼ぶ)で豚肉魚等の目出度ものを買ひ、リヤング(聯)といふ四角な赤紙に目出度い漢字を書いたのと共に花嫁の家に持つて行く。嫁方の宅では奴婢などが墨を油に入れて葉に包んで來たムクゾーの顔に墨を塗るといふ奇習がある。

當日は夜のあけぬ中にムクゾー夫婦が婿を連れて嫁の家に至り、嫁の親は出て一番座敷に通し、嫁側のムクノソーバとユミジョー(嫁代)と嫁の父兄(結婚した)が出て此處で酒を勧め膳を持出し、此時も奴婢等色々の惡戯を婿にする。此處で嫁の父と杯を交はした後、母の居る二番座に行き母とも杯を交はすのである。次にカム

タナ(神棚)といふ内地の雛段の如きものに先祖の位牌を並べた處に行き之に對し婿は酒を捧げ香を燒き、次にトーラ(唐藏)竈のウカマカム(お釜の神)等にも杯と香をあげる。此の式が濟んで婿は兩親に挨拶して歸る。

婿の友達ハ之を待ち受けて胴上げしてムクツザツ又はムクツラツ(賀取り屋)に連れて行くが決して來た途を通らぬ。賀は此處で友達と遊び少し位酒も飲んで居る。

其内に兩家へ祝ひの客が來て饗應を受ける。午前ハ婦人午後ハ男子なり。

嫁が自分の室内に蚊帳を釣り臥て居る處へ晚十時ハ十一時頃に賀の家から小供一二人嫁の家に迎へ、子供の歸つた時賀取屋ハ之を知らせ、男の友人二三人で嫁を迎へに行くのである。此時嫁の友達が蚊帳の中で嫁と談話して之を待ち、迎が來たらば友達ハ之を起し手を引いて戶外へ出し、蚊帳を吊したまゝで其中に嫁を入れて連れて行く。之をジュミビキといふ。嫁は此の如く全く姿を見せずに導かるゝまゝに行き

案内者が手に持つた提灯は途中で持ちかへることを忌むといふ。賀の家では嫁の來た時門前で鹽を蒔き裏口から入れて其まゝ蚊帳を吊つて臥す。

抄録者云ふ、此の蚊帳に包まれて賀の家に連れられる習慣は支那山東地方で旅行中に偶然見た所と似てゐる。支那では新婦は赤い布で包まれた輿に乗つて行くが、室外に出る時から全く姿を見せずに包まれてゐる。内地で猫の子を連れて行くのに包んで置かねば道を覺えて逃げて歸るといふのと同じ様に、一種の捕掠結婚の風習の形式が残つたものと想はれる。大陸の風習と共通なのは大に注意すべきで、前に結納の時に聯を持て行くこと後にいふ支那交通の話など、併せて考ふれば、此の點は大陸の影響であらう。

賀の家では嫁の友達を饗應して歸し、嫁は又た翌朝未明に賀が連れて裏座に入れて人に見られぬやうに自宅に歸る。嫁は其後晝頃になつてから父親が送つて行き、親類六人又は八人之人

同伴し、饗應をうけ、聲方も同敷の親類を出して之に應接する。之をカタイチヤといふ。

三日目の朝花嫁は朝早く起き聲の家族に茶を出し兩人にて一同に挨拶する。

此の如く嫁を宅に迎へるのは長男のみで、次男以下は嫁の家に通ひ、子は嫁の家で養ひ、別家の後初めて嫁を家に入れる。

是が宮古島の風習で、其他種々異つた仕方もある。若い女子の廣場で歌ひ踊るのをクイチヤ(聲合せ)といふが、男子が此處へ來て直接に女子に聲をかけて縁談の端を啓くことがある。

保良ボラでは又た別の仕方で兩親が男子の意志を聞いた後嫁の家に行き、晩に男子が嫁の家を訪ひ一週間位交通した後に初めて定約して結婚式を舉げる。

夫婦間の離婚といふことは全くない譯で、若し離婚すれば其の男子は村人に排斥されて村内に居れぬことになつてしまふ。

次は祭禮の風習である。伊良部にてヌーシウタケといふ森が社で、村人此の前を過ぐる時に

は必ず拜んで通る。此の樹木を繞らした中に石垣に圍まれた廣場がある。伊良部のはタマミガといふが、女神の名がニガといひ、老夫婦があつて其の鍾愛する一人娘の名で、水汲みに行つた後踪跡を失ひ、悲嘆に暮れてゐたのが、或る日此の海岸のヌーシヤマ(ヤマは森のこと)で娘の話をしてゐる處へ現はれた。悦で抱き合つて連れて歸らうとすると、此森の神となつたので歸れぬ、村人の舟に乗つて海上に出た時に災禍に逢はぬ様に之を護るといつて消失せたとといふ傳説がある。即ち是は海の女神である。

此の社の祭禮をカムシユウリといふ。昔ある船が琉球の貢物を持つて支那に行つた歸航に難風にあひ、支那海岸に漂着し、タマミガを祈り支那人に救はれて、金錢食糧を得て順風に乘じ歸つたので、毎年之を祭ることになつたといふ支那人に救はれたのであるから、支那の神に助けられたとしてタウガム唐神を招いて一處に祭る。神主の役は女のみで、昔船中にゐた人の子孫の家に限り之を出すので、其數は三十戸から

二十戸に減つてゐるといふ。

此の祭禮に出る婦人はカムシユ神主といひ主婦が之に當り、祭禮は十一月上旬と十二月上旬に之を行ひ一週間前から婦人は精進して豚肉を喰はず、毎日海水を家に持ち來り之を浴び、夫と別居し、祭目になれば二十町ばかり距つたアダムナ・ウタキといふ森に行き身内の子供を伴ひ、其で着た衣服を脱ぎ之に渡し、袴の如く腰に巻く白いカカンと白衣の装束となつて、此のウタキのカムシユバギといふ蔓のある植物を採つて頭の冠を作り之を戴き、シユダチギといふ木の枝を折り之をタグサとする。

此の神主の頭をツカサ(司)と呼ぶ。

香を燒き神を拜し唐神を招きアダムナウタキよりヌーシユタキに行き、其の側のカムシユヤに入り、唐神を上座にすえてツカサは神と語る普通の世間話から島をよく護られることを乞ひ先祖保護の謝辭を述ぶるなど宜しくあつて、一日一二度カムシユ等は廣場に出て輪になつて踊り、約一時にしてカムシユヤに歸る。

此の如くすること約四日の後初めて村中の二十六歳の男子が御馳走を持ち行き、此の時初めてカムシユを見る。これまではカムシユを見た男は死ぬといふ迷信あり。其の時にはカムシユは

イヌヌク(犬の子)イヌヌク、ウルルと云ひ人でないとして厭勝とす。

唐の神を返して後再びアダムウタケに行かずして家に歸る。十二月再び同じ祭禮を行ふ。

此の他に宮古島にはウジヤム祭といふものありウジヤムは親神の意味にて、何の家の女が出て之を祭るか神託によるものにて、女は病人となり囁語を發す、其人員約二十名にてムツ(墓)に詣る。男之を見れば死ぬといふこと前に同じ。

以上はネブスキー氏の話なるが、我々内地人の尤も面白く感ずるのは此絶海孤島の言語が日本の古語を保存するらしく、又た嫁娶の結納其の他今の内地儀式に見られぬ所の古い習慣が残る、八丈島邊でも既に殆んど絶えんとする夫が

妻の家に通ふ習慣なども残つて、日本神代から上古の間に紀記に見えた所が目のあたりに見らるゝ心地することである。

祭禮に之を主宰する家筋の一定することは京都負郭の村落にあるコウドノの場合と同じくして、婦人が之を擔當するだけ形式が古いらしいのも面白い。

之を要するに今回ネブスキー氏の研究された所は内地に於ては既に全く絶えた風俗で、唯歴史上に見えたので、嘗て行はれたことが知れたに過ぎずして、此の孤島には尙ほ存するものが少からぬを示した。其の解釋如何は別問題として我々の地方的土俗の研究に參考すべき極めて面白い事實が外來の好學の人士に指摘されたことは我々内地の同學者の深省を促すであらうと信じ、ネブスキー氏に謝意を表したい。(小川琢治抄録)

第三號第六版寫眞說明

伊豆伊東町津浪の跡の一は久須美の市街地まで三十尺に近い津浪が鯉船を押し上げ其上で傳馬船が重つて上つて居るもの、二は大河橋附近の津浪の跡の慘狀で鯉船が乗り上つてゐる。

眞鶴驛附近の地之りは海岸に沿ふた村落の崩落した處で、線踏が空に浮いて線面に枕木の痕跡を残したまゝですり落ちた状況である。